カナダ日系史を読んで
ひとつの感想

平野敬一

ケン・アダチ氏のカナダ日系史――『もともと存在しなかった敵』（The Enemy That Never Was）――は、原稿の段階でも閲読の機会を与えられたものだが、豊富な資料を駆使し、一貫した視点でまとめあげた力作であり、カナダ日系史のスタンダード版として長く名をとどめるものと思われる。カナダの日系社会が、いかに理不尽の偏見と差別にさらされてきたか、有無をいわせない形で読者につきつけるアダチ氏の叙述には、怨念に裏打ちされた一種の迫力があり、強い説得力をもっている。これは加害者側――いわゆる白人社会の一部――に是非読んでほしい文献の一つである。（本書は、すでに日本カナダ学会の『カナダ研究年報』創刊号（一九七九年）で今井輝子氏がていねいに書評しているので、関心のある向きは、是非、同誌を参照していただきたい。）

とにかく、資料の豊富さ、構成のみごとさ、視点の一貫性、さらに文章力と、どの点からみても、歴史書として本書は第一級のものといって過言でない。著者アダチ氏が、大見得を切っても少しもおかしくないほどの出来栄えになっているのに、私を感心させたのは、本書のもつ限界を、著者がだれよりもよく知っているらしい点である。序文の中でアダチ氏は、この本はけっしてカナダ日系社会の全容をとらえているものではないと言い、別の立場で書けば、まったく別の日系史が可能であるはず、と言明している。自分が提示するのは、限定された一つの見方にすぎず、日系カナダ人の全史（ゼネラル・ヒストリー）を書く意図は最初からなかった、とはっきり述べている。

こういう言い方を、著者の外交辞令的な謙遜と受取る向きもあるかもしれないが、私はこれをきわめて正確な、著者の自己評価と解している。

いったい、歴史叙述が、はたして全容をとらえうるものなのか、個別史を超えた全史というものが、はたして成り立つものなのか、という議論も起こりそうだが、私には答えられない。全容をとらえるというのは、もともと不可能な話。私たちに可能なのは、限られた一部分を管見することのみ、というのが実相なのかもしれない。

ということであれば、アダチ氏が提示する日系カナダ社会の像と、私がいだく日系カナダ社会の像との間に、ある種の食い違いがあったとしても、それはむしろ当然であろう。とにかく食い違うのである。

話は飛ぶようだが、たとえば日系野球チームのアサヒ軍のこと。少年時代、このアサヒ軍の熱烈なファンだった私にとって、毎シーズンのアサヒ軍の活躍ほど、胸をおどらせるものはなかった。私だけでなく、日系社会全体にとっても、アサヒ軍の戦績は、大きな関心事、大げさにいえば日系社会最大のイヴェントの一つだった。私はそう記憶しているのだが、何年か前の『ザ・ニュー・カネーディアン』紙で、トヨ・タカタ氏がアサヒ軍は日系人にとっては、まさしくフォーク・ヒーローだったと書いている回想記を読み、我が意を得たりと思ったことだった。

アサヒ軍は、その所属リーグをときどき変え、その戦いの場が、ときには草野球場然としたパウェル・グラウンドになったり、ときにはもっとましなコン・ジョーンズ・パークになったりしたが、私は子供に許される限り繁々と両方の球場に足を運んだものだった。忘れ難い選手や試合も多い。一九三五年ごろだったか、日本から遠征してきた、格段に力のまさる東京巨人軍を相手に、果敢に戦った――もちろん勝てるはずはなかったが――アサヒ軍の姿を、いまも忘れることができない。（それにしても、剛腕スタルヒン投手その他の名手を擁していた草創期のジャイアンツのいかに颯爽として強かったことか。しょぼくれた現巨人軍のことを考えると、今昔の感にたえない。）

いや、アサヒ軍の話をしだしたら、きりがない。私がいいたかったのは、かつての日系少年のあこがれの的だったばかりでなく、カナダ日系社会のコミュニティー意識の形成にはかりしれないほどの貢献をしたアサヒ軍のことが、アダチ氏のすぐれた日系史の視野に入ってこない、ということである（一回だけ簡単な言及があるが）。あるいはスポーツ――そう、たかがスポーツ――は、文化史とか社会史の領域に属することがらであり、すぐれて政治史的なアダチ氏の日系史の関知するところでないのかもしれない。しかし、私には、長い歳月をかけてようやく陽の目をみたカナダ日系史が、こういう面を素通りしているのが少なからず残念なのである。カナダ日系社会には、集団としての喜怒哀楽があったはずである。アダチ氏の描くところでは、日系社会に「喜」も「楽」もなかったかのごとくである。あるのは、ひたすら迫害され、差別されてきた日系社会の「怒」と「哀（かなしみ）」のみ。実態は、そうだったのか。

集団がもつ人間的な喜怒哀楽の全容に迫るのは、結局、歴史ではなく文学の仕事、ということになるのかもしれない。大河小説の形で、日系カナダ社会の一世紀にわたる苦難の歩みを、その喜びや楽しみをも視野に入れながらとらえうる、力量ある日系作家が出てこないものだろうか。カナダ日系史を読みながら、そんなラチもないことを、私はときどき考えたりするのである。

（東京大学教授）